

氏名	おくのくみこ 奥野久美子
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第308号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	芥川龍之介 歴史小説の方法

論文調査委員 (主査) 教授 大谷雅夫 教授 木田章義 助教授 須田千里

論文内容の要旨

序章 大正期歴史小説と芥川

芥川龍之介の歴史小説は、近代的なテーマを表現するために歴史的背景を借りただけであり、歴史そのものを描くことを目的とはしないというのが早くからの定説である。近代の歴史小説を論じる際、森鷗外の歴史小説が文学史上の転換点とされるが、鷗外の歴史小説の多くが、歴史考証に基づきその時代の精神を表そうとした所謂正統派の〈歴史小説〉とされるのに対し、芥川のそれは、近代的なテーマを表現するために歴史的背景を借りただけの〈借景小説〉(岩上順一『歴史文学論』中央公論社 昭一七)と言われて区別されてきたのである。

そういった認識が一般的であるために、芥川の歴史小説研究では、細部の典拠の調査や人物造型など、作品の創作方法の検討が看過されることが多かった。しかし、芥川と同時代、同世代の作家たちの歴史小説観を見てみると、彼らも歴史を近代的テーマを表現するための道具として使っており、歴史を描くことを目的としていない点で芥川と同じであることがわかる。また一方で、史実や時代の雰囲気などの〈歴史性〉をどの程度取り入れるか、全く無視してもよいものかどうかという点では各作家間に差があることが確認できる。

歴史を借りたテーマ小説という点が同世代作家たちの共通点であるなら、むしろ〈歴史性〉をどの程度、どのように取り入れているかという差異点に着目して芥川の歴史小説を考えてみるべきではないか。

本論文では、芥川が史上実在の人物を主人公として書いた五つの小説について論ずる。芥川が歴史小説において史上実在の人物を描く際に、〈歴史性〉をどのように取り入れたかということ、つまり、実在人物の造型方法や、時代の雰囲気の演出方法に注目して、各作品を考察する。

第一章 「或日の大石内蔵之助」の方法

「或日の大石内蔵之助」における大石像は、従来の研究では、既存の大石像を裏返して見せただけのもの、〈史実とは無関係に全く芥川自身が恣意的に創造した人物〉などとされ、大石の人物造型の検討は軽んじられてきた。しかし同時代の文壇では、時代の雰囲気が出ている、大石という人物をしっかりとらえているなどと評せられ、芥川の最高傑作と称賛されることすらあった。本章では、同時代の評価と研究史上の評価との落差に対する疑問を解くべく、芥川による大石の人物造型を検討した。

作品の典拠としては従来、「堀内伝右衛門覚書」と『元禄快挙録』があげられ、後者が主な典拠とされてきたが、綿密な比較作業はなされていなかった。比較してみると、芥川は『元禄快挙録』から、諸設定や小道具はもちろん、細かな地名にいたるまでを借りて作品に取り入れていることが分かる。当時、『元禄快挙録』は史実に忠実な史伝として考えられていたものであり、従って、それを典拠にした「或日の大石内蔵之助」が、同時代評にあるように「史実による」と受け取られるのは当然のことであった。

芥川は上記のような典拠だけでなく、作品の時代設定(元禄)と同じ頃の文学である西鶴の「好色一代女」も利用して、

時代の雰囲気を出す工夫をしている。同時代評にあったように、このような工夫によって時代の空気を醸し出したことも評価された。

さらに、明治大正期の大石内蔵之助関連文献を調査し、作品の大石像と比較すると、作品の大石像は同時代に流布していた大石像とかなりの部分まで重なり合うことがわかる。背盟者に寛大である、放蕩を楽しんでいた、などという部分は、従来、既存の大石像を裏返したただけだと言われてきたが、同時代の文献に先例があるものであった。逆に芥川の大石像の新しい点は、〈人間性〉を主とする大石の道德観と、〈忠義〉を主とする世間の道德観との対立構造である。その構造を芥川は唐突に提示するのではなく、既存の大石像とうまく合致させ、無理なく提示している。

上述のような緻密な人物造型方法が、同時代に高い評価を得たのであり、芥川の大石像は決して既存イメージの簡単な裏返しではなかった。

第二章 「戯作三昧」論——〈戯作者〉と〈芸術家〉——

滝沢馬琴の創作生活を描いた「戯作三昧」は、作者芥川龍之介の芸術観を馬琴に託した作とされる。しかし、典拠の『馬琴日記鈔』や明治大正期の馬琴関連文献では、「戯作」の語は軽蔑的に使われている。にもかかわらず「戯作三昧」の最終章では、馬琴の恍惚の境地を、それ以前の章で使っていた「芸術」の語ではなく「戯作」の語を使って描いている。先行研究では、馬琴＝芥川＝芸術家という先入観のためにこのような語の使い分けが見落とされていた。

「戯作三昧」発表と同時代の小説類における芸術家像を調べると、最終章以前の馬琴像は典型的な大正の芸術家像を踏襲している。また作品において馬琴は幼い孫によって安らぎを得るが、このような、老人の頑なな心を解き放つ幼子というモチーフは、イギリスのロマン派文学やその影響を受けた明治大正文学の子供観に共通するものである。孫は従来論じられていたような、馬琴を「芸術」の高みへ導く存在というのではなく、むしろ馬琴の「芸術」への執着を解き放つ存在であると言える。つまり作品には典型的芸術家像から脱し、芸術への固執を捨てて〈戯作者〉へと変化する馬琴が描かれているのである。

また「戯作三昧」には、芥川の他の歴史小説と同様に、時代の雰囲気を出し工夫がなされている。この作品の冒頭部分、馬琴が訪れる銭湯の場面には、馬琴と同時代の戯作者、式亭三馬の「浮世風呂」が本文のみならず挿絵ごとに取り入れられており、芥川の方法の一端をうかがうことができる。

第三章 「枯野抄」論

「枯野抄」は芭蕉の臨終とそれを囲む弟子たちの心理を描いた作品である。弟子の一人である丈草が、他の弟子たちと同様に利己的な思いを懐いて芭蕉の死を見ていると解釈するか、それとも丈草だけを他の弟子たちとは区別するかという点で研究史上の見解が分かれている。

本章では、まず典拠の『花屋日記』をはじめ芭蕉や蕉門に関する諸文献に見られる弟子たちの特徴と「枯野抄」におけるそれを比較し、さらに「枯野抄」発表当時の文壇に流布していた諸作家の小説や外国文学における人間心理と、「枯野抄」の弟子たちの心理とを比較した。その結果、各弟子たちの外面的特徴や性格の特徴というレベルでは丈草に他の弟子たちと差異化できるような特異性はなかった。しかし、弟子たちの心理の描かれ方について考察すると、他の弟子たちが芭蕉の死を、特に芭蕉でなくても構わない人間一般の死としてとらえているのに対し、丈草のみが芭蕉を芭蕉その人でなくてはならない〈人格的圧力〉という点からとらえていることがわかる。

さらに芭蕉の辞世の句が〈暮色〉、丈草の感慨が〈夜明け〉という比喩で語られていることから、芭蕉の死による丈草の再生というテーマが見出された。「枯野抄」は既存の人物像や人間心理に沿いつつ、丈草を通じて独自のテーマを打ち出した作品であった。

第四章 「鼠小僧次郎吉」の方法—講談本からの影響、後世への影響—

「鼠小僧次郎吉」は講談で人気の鼠小僧を主人公とした作品であるが、これまで講談本との比較や、講談からの具体的影響の指摘はなされていなかった。一方で、作品のテーマにはアイルランドの劇作家シングの「西方の人気者」の影響が指摘されており、大のつく悪党にはかえって頭を下げるという人々の心理が共通している。作品では、冒頭から話をしている男が、最後になって自分こそ鼠小僧だと告白するが、この点を「最後に種明かしをする芥川得意の技法」と見るか、男の告白をも疑うべきだとするかで、先行研究における見解が分れている。

本章では、鼠小僧の講談本との比較をもとに、この作品の「親分」と呼ばれる男の描写には、講談本において鼠小僧を示す数々の小道具が冒頭から取り入れられていることを論証した。つまり、講談の鼠小僧に親しんでいる読者になら、男の告白というダメ押しがなくともその男が次郎吉だと読めるようになっていく。従って、ダメ押しを必要としない読者にとって新鮮なのは、男の告白の意外性ではなく芥川がシングから借りたモチーフである。このモチーフを、さらに芥川から借りて自作に活かし、講談や歌舞伎も取り混ぜながら鼠小僧の戯曲を書いた劇作家、林和がおり、その戯曲が映画化もされている。芥川がシングの戯曲を取り入れて新たに作った鼠小僧の逸話は、そのような形で引き継がれることになったのである。

併せて作品の続編の計画（草稿）に見られる講談や歌舞伎の影響についても考察し、「鼠小僧次郎吉」の方法を総合的に論じた。芥川作品研究の中でも、講談本との比較研究はほとんどなされていない状態であったが、本章における考察により、主要な典拠としてではないが芥川が講談本を材源にしていたことが明らかになった。

第五章 「將軍」考——桃川若燕の講談本『乃木大将陣中珍談』との比較——

「將軍」はN將軍（乃木希典將軍がモデル）を周りの兵卒や士官たちの眼を通す形で描いた作品で、従来の研究では典拠は明らかにされていない。本章では、「將軍」発表の十年前に刊行されていた桃川若燕の講談本『乃木大将陣中珍談』と作品を比較検証し、芥川の創作方法を明らかにした。

両者を比較してみると、芥川「將軍」は『陣中珍談』のエピソードをかなりの部分取り入れているが、『陣中珍談』が乃木崇拜で一貫しているのに対し、「將軍」では『陣中珍談』にはない人物の視点を加えることによって、N將軍の俗人ぶりを皮肉を込めて描いている。

さらに、『陣中珍談』を同時代の他の乃木文献と比べてみると、「將軍」との関わりでは、白襷隊と陣中芝居のエピソードは他の文献にもあるが、露探処刑のエピソードは管見の限り他の文献には見られない。逆に、〈孝行兵士〉や〈信州紀行〉など乃木伝としてあまりに有名なエピソードは、『陣中珍談』にもあるが芥川は取り入れている。芥川は、よく知られた乃木像を裏返すといったことよりも、周辺人物の視点を使って批判を加えることを重視し、そのために使いやすいエピソードを取り入れたのである。

芥川が日本の古典や外国文学だけでなく、大衆演芸の部類に属する講談本にまで典拠を求めていたことが、上述の検証によって初めて明らかになった。

終章 同時代文壇の中の芥川歴史小説

芥川が本論文で論じた歴史小説群を発表していた大正期には、歴史ものの方法論についてもさまざまな言説がなされていた。具体的には、史実や時代の雰囲気などの〈歴史性〉か、史上人物の近代的な新解釈か、どちらに重きを置くかということが問題になっていた。本章ではそれらの歴史ものをめぐる評論の類を確認して、当時の文壇の空気の中に置いてみたとき、芥川の方法がどのような意義を持つのかを考察した。

数々の評論を検討してみると、近代的なテーマを織り込んだ、史上人物の新解釈が流行し、求められもする中で、新解釈の行き過ぎによる〈歴史性〉の軽視、無視を批判する声も高まっていたことが具体的に確認できた。〈歴史性〉にも新解釈にも偏りすぎず、両者をバランスよく取り入れることが求められていたのであり、〈歴史性〉と作品独自のテーマとの無理のない融合を試みた芥川の方法は、歴史ものをめぐる文壇の要請にかなったものであった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、芥川龍之介の歴史小説を、芥川が執筆に当って直接参照した同時代資料、他作家の作品、あるいは歌舞伎や講談に至るまでの典拠を博搜して特定し、それらと比較対照することによって、その歴史小説としての主題と方法を明らかにしようとする試みである。言うまでもなく、芥川自身はそれらの典拠を明示するわけではない。従って、比較的簡単に典拠を調査しうる王朝物については、従来の研究においても相当の成果があげられてきたが、調査すべき範囲の余りに広い江戸時代や明治時代を舞台とする歴史小説については、それらの典拠の研究はほとんど手をつけられないままに今日に至っている。本論文は、その未開拓の分野に挑んだ労作である。

芥川の歴史小説をその典拠と対照しつつ読むことによって論者が明らかにしえたことの第一は、登場人物の造型についてはもちろん、小説中の小道具、ささいな挿話に見える地名などにも、芥川が典拠をいちいち参照し、それを忠実に襲うこと

である。芥川はその才気にまかせて小説世界を自由自在に作り上げた作家では必ずしもなく、むしろ歴史資料を丁寧に参照し、その利用により、時代時代の雰囲気を通り越して表現しようとしたことが確認されたのである。その中で、たとえば典拠の「芝通町」が刊行された芥川の小説では「其通町」となり、「全勝堡」が「全勝集」とあるのが、字形の類似による誤植であろうことも指摘された。典拠研究は、小説の注釈的研究にはもとより、本文校訂においてもまた欠くべからざる方法であることが、本論文によって示されたのである。

本論文の功績の第二は、芥川の歴史小説において、典拠がその細部に至るまで忠実になぞられることを確認した上で、その一方で典拠から離れ、それを変容させるところがあるのを見だし、そこに芥川の強い主題意識を捉えようとしたことである。その方法が特に成功をおさめ、圧巻とも言うべきは第五章の「將軍」考であろう。日露戦争の乃木將軍をモデルとするこの小説は、かねて講談本と何らかの関わりをもつことが予想されてきたものではあるが、論者は、数ある乃木ものの講談本のなかで、粗筋や挿話において小説「將軍」と完全に重なるものとしては、その執筆の十年前に刊行されていた二代目桃川若燕の講談本『乃木大将陣中珍談』の他にないことを突き止めた。そしてその上で『陣中珍談』と「將軍」の双方の記述を比較対照し、芥川がほとんど全ての材料を『陣中珍談』に得ていながら、その叙述の順序を改め、また典拠にない語を付け加えなどしたことを具体的に示して、講談本が乃木將軍をあくまで一大英雄として語ろうとするのに対して、芥川が將軍を残忍で頑固な俗物として戯画化し、軍人や戦争への鋭い批判をこの小説にこめようとしたことを明らかにした。典拠が確実に押えられることによって、芥川の小説の主題は、まことに明瞭に浮彫りになったのである。しかも、論者は、そのような乃木將軍への皮肉な見方が大正十年代の読者にとって共感されやすいものであったこと、そして、それが後には知的軽薄さとして批判を受けるようになったことにも論及する。時代思潮の流れの中に芥川作品をしかるべく位置づけようとする態度も、本論文のすぐれた特色の一つとして評価できるものである。

以上のように、本論文は芥川の歴史小説をその典拠との比較対照という方法で分析して、論述はあくまで客観的であり、信頼するに足るものである。しかし、歴史小説の典拠の認定については、難しい問題に触れないでもない。たとえば芥川の小説の描写にそっくりな描写を含む同時代小説がある場合、それを芥川が参照した典拠と認めるか、あるいは単なる類型的な表現と考えるか。本論文には、その判断の曖昧さが時に見られるように感じられる。また、芥川小説の主題が論じられる場合、その抽象的な概念にやや不明晰さの残る場合がないわけではない。それらの点は、論者の今後の研究にとって重要な課題となるだろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十七年一月十三日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。